

20062

看護師・看護学生の放射線に関する意識調査からみた放射線教育の重要性

¹東北厚生年金病院、²東北厚生年金病院、³東北大学

森島 貴顕¹、片平 美明²、繁泉 和彦¹、千葉 浩生¹、千田 浩一³

【目的】近年、心筋梗塞、狭心症等の循環器疾患の増加に伴い心臓カテーテル検査（心カテ検査）はP C I等のカテーテル治療（I V R）へと拡大しておりX線透視・撮影時間が通常の診断検査に比べ長くなる傾向にあり、術者及び患者の被曝線量の増加が懸念されている。東北厚生年金病院（以下当院）では診断・治療を含め年間1,500件以上の心カテ検査が行われており、スタッフの放射線被曝が懸念される。そこで、当院看護師と当院で病院実習している看護学生対象に放射線に関する意識調査を行い放射線に関する知識の現状を把握し放射線教育について検討する。

【方法】2008年（216名）、2010年（310名）の2回、当院看護職員を対象に、放射線教育、放射線被曝、日頃から疑問に思っていることについてアンケート形式で調査を行った。また今年、看護学生対象（63名）に同様の調査を行った。

【結果】日常業務において、ポータブル撮影時の適切な行動や個人被ばく線量計の正確な装着部位などの基礎的な知識が十分でなかった。看護学生においては将来、放射線業務に関わることに不安をもっていることなどがわかった。

【考察】放射線に関する知識の現状を把握し、放射線教育の重要性について検討するために、当院看護師と看護学生対象に放射線に対する意識調査を行った。その結果、放射線に関する知識は決して正しいとはいえず、放射線教育の重要性が示唆された。今後、定期的な研修会や勉強会を計画し、放射線防護教育に役立てたいと考えている。